
遊技王 5Ds 黒き鎧の龍

アルトアイゼン・リーゼ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊技王5Ds 黒き鎧の龍

【Nコード】

N2145Y

【作者名】

アルトアイゼン・リーゼ

【あらすじ】

サテライトではデュエルギャングの戦いが続いていた
そんなある時 鬼柳 京介率いるチームサテイスファクション
に新たなメンバーが加わる
そして時は流れ・・・チームサテイスファクションはサテライトを
統一した
ある時チームの一員ジャック・アトラスが不動 遊星のエアースモン
スター

『スターダスト・ドラゴン』を持ち出しシティへ行ってしまふ

そして物語は加速する

出会い

「ダークスピアー!!」

と言う掛け声とともに

『グワアギヤアアン!!!』

と爆音にも似た声で邪悪な色をした光線が放たれ人間に直撃した

「うわあああ!!」 LP2000

所謂ダイレクトアタックを決めある男が勝利した

「さあ俺の勝ちだ約束どおり出て行ってもらおう」

「く……くっそおお!!!!」

男は取り巻きを連れて去って逝った

字が違うと思うが気にするな

男はディスクからデッキを外し地面に座った

「弱いな……こいつ等が満足できないじゃないか……」

ザ……ザ……ザ……

足音が聞こえてきた

そちらの方に顔を向けると4人ほどがこちらに向かってきていた

「……ここにいたデュエルギャング『バットワークス』を倒したのはお前か?」

水色っぽい髪した男が聞いてきた

「バットワークス？・・・ああ、あの弱いくせに威張り腐ってた奴らか・・・」

奴らなら全員俺に負けて俺にここを明け渡してくれたぞ」

「そうか・・・お前・・・満足してるか？」

「？」

おかしい事を聞いてくるな

「少なくとも俺とこのデッキの仲間達は満足してない・・・
相手が弱すぎて消化不良だ・・・」

満足していないつとと言うと男が笑った

「なら俺たちのチームに入らねえか？」

「あん？どつという話の流れだよ？」

「満足してねえなら俺達のチーム『サティスファクション』に入れ！
満足させてやるぜ！」

「・・・面白いな・・・お前・・・気に入ったよ・・・入ってみる
かな

アンタ等のチーム・・・『サティスファクション』とやらによ！」

「交渉成立だな！」

男は立ち上がり話を持ちかけてきた男と握手をした

「俺の名は鬼柳 鬼柳京介！」

「俺は斬鎧 死龍 斬鎧だ」

いでよ！サイバー・ダーク・キール！ 昔の記憶

サテライト・・・

ネオ童実野シティの最下層

地区ごとにアルファベットがふられている

身分の低い者の居住区で中心部とは対照的に暗く寂れており、スラム街に近い

また、中心部の繁栄を支えるための工場や施設が並び立っており、中心部から排出される廃棄物の処理も行われる

犯罪者等もここに送られてくる為か、ここに住む者を「クズ」と呼んで卑下するシティの人間は少ない

そこに1人の男がシティへと繋がるゴミ運搬用のパイプラインを抜けシティに辿り着いた男がいた

その名は不動 遊星

彼の友であるジャック・アトラスに奪われた自身のエース

『スターダスト・ドラゴン』を取り戻すために

そして・・・もう1人シティに向かおうとしている者がいた・・・

カタカタカタカタツ・・・

寂れた地下鉄のホームにキーボードを打つ音が響く

そこには腰にまで届く長い黒髪を靡かせキーボードを打ち込んでいる者がいた

そこに小柄で女にも男にも見える子がやってきた

「斬鎧ッ！！」

彼はキーボードから手を離して後ろを向いた

そこに居たのはラリー・ドーソン

遊星の仲間でもある者

「なんだ？」

「どう行けそう？」

「お前はマーカー付きで行けんが・・・俺は行けそうだ」

「ありゃ・・・やつぱり？」

「ああ、今日の午後到此処を立つ」

「そっか！遊星によろしくね！」

「ああ分かつてる」

斬鎧サイド

俺はシティに向かうべくゴミを再生して再使用するというシステムのため作業船の

乗船員の中に俺の名を忍ばせた

かなり時間を要したがな・・・早く終わらせられれば遊星もこの手で行けたのだが・・・

俺は大切なデッキを持ち

所々黒く白いがベースのボディは輝いている俺のDーホイール

『フューチャーホープ』に乗り港に向かった

そこでは既に乗船が始まっていた

「・・・乗船者　ガイスト・サーガだが・・・」　「偽名です」

「はい少しお待ちを・・・確認しましたではどうぞにしてもDーホイール何て羨ましい」

ホープを押しして車庫に入る

Dーホイールを止めた所で船は出た

暫くしてシティについた

さてこれからどうするか・・・
とりあえずダイモンエリアに向かう

ダイモンエリア

マーカーがついた者でシティにも行けずサテライトにも行きたくない者達が集まる場所

ここなら俺は目立たんだろうマーカーはないが・・・
ホープを走らせていると

モノサイクル（一輪）タイプの白いハイブリッドタイプのDーホイールが目についた

搭乗者は誰かと話しているのか？
すると白いDーホイールは走り去った

跡を見ると遊星がいた

「遊星！」

声をかけると俺の顔を見て驚いていた

俺はホープを押しして遊星の元に行く

「よお」

「本当に来てくれたのか・・・ありがとう斬」

「俺の方こそ悪かった、あの時ホープが不調じゃなきゃ一緒に行つたのによ

で遊星そっちの方達は？」

俺は遊星の近くにいる3人の事を聞く

「収容所で世話になった、矢雑のじいさんと氷室

Dーホイールとデッキ取り戻す時に世話になった雑賀だ」

「ふん・・・俺は死龍 斬鎧だ気軽に呼んでくれ」

「わしは矢薙かじいさんと呼んでくれ」

「氷室だ、遊星に聞いた話じゃかなりの腕前だそうだな？」

「雑賀だ」

「よろしく」

「どうだ？俺とデュエルやらんか？」

「いいぜ」

俺はDーホイールからディスクを外す

「デュエル！！」

LP4000 4000

「俺のターン ドロー 俺はヘルドラゴンを召喚
カードを2枚伏せてターンエンド」

「俺のターン！地雷蜘蛛を召喚！

このカードの攻撃宣言時、コイントスで裏表を当てる
当たりの場合はそのまま攻撃する

ハズレの場合は自分のライフポイントを半分失い攻撃する
俺は裏を選択！」

コイントスは・・・裏

「おし！地雷蜘蛛で攻撃！」

ヘル・ドラゴンは蜘蛛の糸で破壊された

「俺はこれでターンエンド！」

「状況的には氷室ちゃんの方が有利だね」

「ああ地雷蜘蛛は攻撃力も高い壁にもなるからな」

「それはどうかな？」

遊星が声をあげる

「どついう事だいあんちゃん？」

「ここからが斬の真骨頂だ」

「俺のターン ドロー 俺はサイバー・ダーク・キールを召喚！」

光り輝く円から出て来たのは細い一本の体の黒く所々からケーブルが出ている

「な、何だそのモンスターは！？それにサイバーだと！？」

「このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時

自分または相手の墓地に存在するレベル4以下のドラゴン族モンスター1体を選択し

装備カード扱いとしてこのカードに装備する

俺は俺の墓地のヘル・ドラゴンを装備する」

墓地からヘル・ドラゴンが現れキールが体の中央部に廻し

全身のケーブルでヘル・ドラゴンに巻き付ける

「そしてこのカードの効果で装備したモンスターの攻撃力分アップする」

A T C 8 0 0 2 8 0 0

「じ、地雷蜘蛛の攻撃力を上回った！？」

「キール！地雷蜘蛛を攻撃！ダーク・ウィップ！」

キールは尾を鞭の様にして地雷蜘蛛に打ち付け破壊する

「くっ!!」

LP 4000 3500

「このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、相手ライフに300ポイントダメージを与える」

「なに!?!」

LP 3500 3200

「俺はこのままターンエンド」

「くっ・・・俺のターン・・・俺はクッ・・・ターンエンド」

「俺のターン ドロー 俺はアックス・ドラゴニートを召喚!

キール!アックスで攻撃!ダーク・ウィップ!ドラゴアックス!」

鞭と斧が同時に襲いかかる

「うわあああ!!!!!!」

LP 3200 0

「俺の勝ちだな」

「ふう・・・負けたかあ」

俺と氷室は握手をした

「にしてもまさかサイバー流をこの目で見えるとはな・・・」

「まあ今のは裏サイバーっと言うのが正しいんだ」
「裏サイバー？」

俺はサイバー・エンド・ドラゴンを出す

「ああ、俺のデッキはサイバー・エンドを象徴としリスペクトデュエルとする表

サイバー・ダークを中核としたただ勝利を追い求める裏サイバー

真逆の二つの混合して作り上げた真のサイバーデッキだ」

「なるほどな」

「これからどうするだ？」

「ダイモンエリアのデュエルエリアに行こうと思う」

「なぜ？」

「そこなら俺達は目立たないからな」

「じゃあ俺も付き合おう」

俺は雑賀の所にホープを置かせてもらい

ダイモンエリアに向かう

そこに着いたときには夕方になっていた

大衆の前でデュエルが行われている

「確かに此処はマーカールだらけ目立ちほしくないな」

「そうだ斬、これをお前に渡せと」

遊星は手紙を渡してきた

「これは？」

「治安維持局の者がお前に渡せと言ってきた」

俺は封を切る

そこにはデュエル・オブ・フォーチュンカップ招待状と書かれていた

「俺に？」

「俺にも来ている」

「まあ誘いに乗るのもいいかもしれんな」

すると遊星は二人の子供に目を向けた

「ん？あれは……」

「どうした遊星？」

「あ！ゆうせうい！！来いよ天兵！このデュエルディスク
カスタマイズしてくれた人だぜ！！」

「カスタマイズ？カスタマイズじゃなくて？」

突っ込む俺

その緑色の子は見覚えがある

「遊星！」

「こんな所でなにをしている？子供が来る所じゃないぞ」

「おい……龍亞……あれマークじゃないか？……」

もう1人の子はマークを見て警戒している

まあ当然か……

「えへへ……って！そつちの人！」

龍亞は俺の顔を見る

「？」

「も、もしかして……斬兄ちゃん！！??？」

「・・・斬・・・お前弟が居たのか？」

「いや・・・居ないと思うが・・・」

「覚えてないの！？って言うか斬兄ちゃん死んだじゃないの！？
龍可なんてすごいシヨックだったんだよ！？」

何を言ってるのだ？この子？

龍可？龍亞？あ・・・

何か頭に引つかかる・・・

俺が死んだ？

どういう事だ・・・

「龍亞、斬が死んだとはどういう事だ？

斬はサテライトに居たんだぞ？」

「え！？だって斬兄ちゃんは！！事故で死んだって！」

「何！？」

遊星は俺の顔を見る

事故？

死んだ？

う・・・何かが頭に浮かんで・・・

「えへへ・・・やっぱり斬兄ちゃんは強いや」

「本当龍亞これで10戦0勝10敗ね」

「むう〜龍可それを言うなよ！」

「ははは、にしてもいい加減兄って呼ぶなって」

「いいじゃん俺達にとって兄ちゃんみたいな存在なんだから」

「そつよそれともいやなの・・・？／／／／／／／／」

「・・・はあ分かった分かった好きにしる・・・」

これは・・・過去の記憶？

俺の昔の記憶は無くなっている
これが俺の記憶なのか？

「これでわかったでしょ！！私とデュエルしたらお兄ちゃんを傷つけちゃう！」

なんだ？これは？

「大丈夫だよ俺も同じ力を持ってる、それにこれぐらいじゃ傷つかないよ」

さあ続きをやるうよ」

「う、うん・・・恐くないの？私が？」

「怖い？どこが？」

同じ力？

俺は・・・いつたい・・・

「・・・ざ・・・斬！」

「・・・わ、悪いぼくとしてた・・・」

「大丈夫か？」

「ああ・・・それと・・・少し昔を思い出したようだ・・・」

「本当！」

「ああ・・・すまなかつた・・・龍亞・・・」

デュエルしていた時の事を思い出した・・・」

すると周りが魔女が現れたつと騒ぎ始めた

「魔女？」

「何の騒ぎだ？」

「まずいあいつが居るのか・・・！」

「誰？」

「早く此処から離れるぞ！」

すると煙の中から龍の様な姿が見えた

「ドラゴン？」

すると遊星が右腕を抑え手袋の一部を捲ると腕が赤く光っていた

「これは……」

すると煙が晴れると赤い花びらのような体を持った龍だ

そのドラゴンの近くにはフードを被り仮面を付けている奴が居るな
そいつは俺と遊星を見ると動きを止めた

「お前も……あなたは……」

「お前も？」

遊星は近づくと

「忌むべき印だ!!」

魔女は何かをセットした

その閃光と衝撃が巻き起こった

その時俺は何をしたのか分からなかった

反射的に俺はサイバードラゴンを3体召喚していた

そのサイバードラゴン達は自ら俺達を守るかのように
盾となり衝撃を和らげた

閃光が弱まり視界がはっきりとしている時には

魔女は居なかった

「何が起きたんだ？」

「いま何が起きた！吹っ飛ばされそうになったら今度はあんちゃんのモンスターがワシ達を守ってくれたぞ！」

「斬……」

「サイバードラゴン……」

「シャウウ……マスター……お怪我は？」

「!?!」

中央のサイバードラゴンが喋った!?!?

『お怪我をされたのですか!?!?!』

次は右のサイバードラゴンが

『大丈夫か?』

次は左……

「あ、ああ……」

『それは良かった……』

『ああ！私のマスターにお怪我が無くて良かった!?!?!』

『おいお前だけのマスターじゃないだろう』

「いつたいなんだよ……」

そしてサイバー達は消えた……

「斬……いまのは……」

「……サイバードラゴンが……実体化したのか……?」

再会ーおもいー

「ねえ！斬兄ちゃん！家に来てよ！」

なぜサイドラが実体化したのか悶絶していると龍亞が服を掴んできた

「いや・・・だが・・・」

「いいじゃないか」

遊星が声をあげる

「斬、積もる話もあるだろうホープの方は俺が整備しておく」

「だが・・・分かった遊星頼むよ」

「任せておけ」

「じゃあ行くっ！」

龍亞に手を引かれ彼の住まいであるトップスのマンションの屋上階
到着した

「ただいまー!!」

「おじゃまします」

部屋を進むとキッチンで料理をしている子が目についた

「もおー龍亞！幾ら何でも遅すぎるわよ」

そういつて此方を振り向いたら硬直した

側に居てよおおお・・・おにいちやああああん・・・」

龍可は俺の腹部に顔を疼くませて泣き続ける

「泣くな・・・龍可・・・」

「でもおお嬉しくてええええ・・・」

「俺も嬉しいよ、じゃあ龍可のお願いを聞いてあげるよ」

「じゃあ・・・一緒に寝てくれる・・・?」

ハードル高いなおい

「ああ・・・もちろんだ・・・」

その時の龍可は満面の笑みを浮かべていた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2145y/>

遊技王 5Ds 黒き鎧の龍

2011年11月10日04時43分発行